

研究実施のお知らせ

2018年6月8日 ver.3

2022年7月8日 ver.4

研究課題名

子宮がん、卵巣がんにおける分子標的治療確立のための癌関連遺伝子の遺伝子、タンパクの後方視的解析

研究の対象となる方

1994年1月から島根大学医学部附属病院および試料提供を行う共同研究機関を受診し、子宮がん、卵巣がん、子宮良性腫瘍、卵巣良性腫瘍と診断され、治療を受けられた方

研究の目的・意義

【背景】近年の、分子生物学の急速な進歩により、腫瘍細胞の特性(分化、増殖、進展)を規定するメカニズムが徐々に明らかになり、これら特定の分子を標的として、その機能を制御する薬剤(分子標的薬剤)が臨床応用されつつあります。腫瘍組織における遺伝子、タンパクの研究により婦人科腫瘍における特有の遺伝子変化を同定する事により、将来の新規分子標的薬剤の開発が可能となります。

【目的】子宮がん、卵巣がんの癌関連遺伝子、関連タンパク質の発現レベル、変異を検討し、患者さんの予後との相関を検討し婦人科腫瘍における分子生物学的予後因子及び新規分子標的因子を検索する事です。

【意義】分子生物学の進歩により、癌細胞の特性(分化、増殖、浸潤、転移)を規定するメカニズムが明らかとなり、これら特定の分子を標的として、その機能を制御する分子標的薬剤が研究開発され、乳癌や白血病の分野で臨床応用されています。しかしながら、子宮がん、卵巣がんの領域では未だ、有効な分子標的薬剤は存在せず、標的因子すら同定されていません。これまで当教室では複数の新規癌関連遺伝子(RSF-1、NAC1、Notch3、MKK4等)を発見してきました。これまでに子宮がん、卵巣がんにおいて分子標的治療のターゲットになりうる特有の遺伝子、タンパクはこれまでに報告されていないため、発見できれば子宮がん、卵巣がんに対する分子標的治療薬開発の新しい糸口となると考えます。また子宮がん、卵巣がんの予後改善につながるため研究の意義は極めて大きいと考えられます。

研究の方法

子宮がん、卵巣がん、または良性婦人科疾患で治療目的に手術を受けた患者さんの腫

瘍組織、正常卵巣、子宮組織を凍結、培養、ホルマリン固定を用いて保存します。これらの検体より DNA、RNA、タンパク質を抽出し、さらに詳しく遺伝子変化を調べていきます。調べる遺伝子は腫瘍細胞の増殖、分化、進展にかかわる遺伝子です。

この遺伝子、タンパク研究によって得られる個人情報決して外部に漏れることないように責任をもって厳重に管理します。また、病院関係者にも漏れることないように管理いたします。提供された検体から DNA やタンパクが抽出された段階で、新しく番号を付け、その番号で解析します。このとき、個人情報は削除し、DNA やタンパクが誰のものかわからないようにします。研究に用いる検体、診療情報、解析データは島根大学医学部産婦人科学講座において厳重に管理します。

研究の期間

2007 年 5 月～2026 年 12 月

研究組織

この研究は島根大学医学部産科婦人科学講座を中心として行うもので、島根大学医学部附属病院産科婦人科を含む全国の 10 機関が参加しています。

島根大学産科婦人科: 京 哲教授

聖隷浜松病院産科婦人科: 中山理 院長補佐

熊本大学産科婦人科: 田代浩徳教授

Johns Hopkins 大学病理学: Ie-Ming Shih 教授

島根県立中央病院産科婦人科: 奈良井曜子 産科婦人科部長

松江赤十字病院産科婦人科: 藤脇律人 産科婦人科部長

金沢大学産科婦人科: 中村充宏講師

国立がん研究センター: 発がん・予防研究分野 清野透主任分野長

オンコリスバイオファーマ: 浦田泰生代表取締役

倉敷成人病センター: 安藤正明 倉敷成人病センター長

相談・連絡先

この研究について、詳しいことをご存知になりたい方、ご自身のデータを研究に利用してほしくない方、その他ご質問のある方は次の担当者(研究責任者)にご連絡ください。

なお、既に誰のものかわからなくなっている検体等については、利用拒否のお申し出をいただいてもご要望におこたえすることはできませんのでご了承ください。

島根大学医学部産科婦人科学講座准教授 中山健太郎

〒693-8501 島根県出雲市塩冶町 89-1

電話 0853-20-2268 FAX 0853-20-2264